

宮大工 西岡常一の遺言

山崎 佑次 著
(彰国社・1890円)



やまさき・ゆうじ
1942年生まれ。ビデ
才映像制作会社で西
岡常一のインタビュー
一作品を手がける。
現在は文筆家。

建築にかかわるすべての人と、ここに書かれている内容について車座になって話してみたい思いに駆られる。法隆寺修理、薬師寺金堂再建などを手がけた西岡棟梁から著者が聞き取るのは、美しいニッポンの、気の遠くなるような過去からの知恵と実践である。

導入文にある、棟梁の家の描写が印象に残る。「自分を飾ることも立派に見せることもしない、余分なものをそぎ落とし…天下の棟梁にふさわしい豪華な家具を置くことも、威厳あるしつらえをすることも拒否する」

紺屋の白袴こんやのしろはかまというのだろつか、質素すぎる、と著者は驚きもしたが、よくよく考えてみればこの家こそ鬼の棲家だ、と迷懐するくだりは私の琴線に触れる。自然体で無私を貫いた人間に相對する聞き手の気配が、そこに感じられたからである。

読み進めると棟梁の金言が随所に響く。「けれど木はえらいですがな。東塔はね、千二百年以上も生き永らえているんです。…美しい、これ以上ない見事な姿ですくっと立ってるんでっせ」「職人といつのは一歩一歩の積み重ねが大切で途中を

木のいのちに触れる知恵

端折はしりすることはできんのです」「一本の木を見たらこれはどつう山で育ったのか、南側に生えていたのか北側なのか、嶺たねに近いところか谷なのか、いろいろ考えます。…まずは木に感謝するというのがいちばんです」
棟梁と作家幸田文あきとの対話が挿入されている。やわらかなぬくもりが流れる。西岡にとつて幸田文がどれだけ大切な存在だったのか描かれているのだ。

西岡建築論は壮大に、具体的に展開される。まさしく木のいのちに触れる旅。「国破れて山河あり、山河あるところ草木あり、草木の生じるところ民草必ずあり」と著者は、最後に西岡棟梁の言葉を援用して本書を結ぶ。苛烈かじな人生をきわめた棟梁の晩年の同行者が、美しいニッポンの木の文化をどつするののか、読者に問いかけている。

〈評者〉鈴木喜一

(建築家)